救急救命学科　シラバスの変更一覧

| 学年 | ページ | 科目名 |
|---|---|---|
| 1年 | 32・33 | 救急症候学Ⅲ |
| 1年 | 38・39 | 疾病救急医学Ⅲ |
| 1年 | 40・41 | 疾病救急医学Ⅳ |

| 学修成果 | 1<br>基礎力 | 2<br>実践力 | 3<br>人間関係力 | 4<br>生涯学習力 | 5<br>地域理解力 |
|---|---|---|---|---|---|
| | ● | ● | | ● | |

| 科目ナンバリング |
|---|
| EM-2-ESP-04 |

| 科目名 | 救急症候学Ⅲ | | | 単位認定者 | 佐藤　武諭毅 | | 評価の方法 | 試験(筆記) | 90　% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 対象学科<br>必修･選択<br>配当年次 | 救急救命学科 | 必修 | 1年 | 開講時期 | 後期 | 単位数 | 2　単位 | 受講態度 | 10　% |
| | | | | | | 授業時間数 | 40　時間 | | |
| | | | | 授業形態 | 講義 | 授業回数 | 20　回 | | |

| 授業の概要 | 救命救急の現場では、疾患単位の知識と症候学の知識の両者がそろって初めて傷病者に対する理論的で確実な対応が可能となる。特に、腹痛をきたす疾患はきわめて多く、腹痛症状は救急搬送において最も頻度の高い症状のひとつであり、各所見を観察し、適切な処置を施す必要がある。「救急症候学Ⅲ」では、主に腹痛、吐血・下血、腰痛・背部痛、体温上昇等について、それぞれの発症機序、症候、症状、所見、予後、観察、評価、鑑別処置及び搬送法等を学修する。救急救命の現場において遭遇することの多い症候に関する知識を身につける。 |
|---|---|
| 到達目標 | 症候の理解を深め、バイタルサインや観察と結びつけられ一つの症候にとらわれることなく、病態の緊急度・重症度を説明できる。 |
| 学修者への期待等 | 頻度の高い症状のため、テキストを熟読し内容を整理して理解を深めてください。 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間(分) | 事後学修時間(分) |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 消化系臓器について | 事後学修：テキスト第１章の「消化系」を復習する | 60 | 0 |
| 2 | 腹痛①　発症機序 | 事前学修：テキスト第４章の「腹痛」を読み予習する<br>事後学修：キスト第４章の「腹痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 3 | 腹痛②　原因疾患、部位 | 事前学修：テキスト第４章の「腹痛」を読み予習する<br>事後学修：キスト第４章の「腹痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 4 | 腹痛③　既往歴 | 事前学修：テキスト第４章の「腹痛」を読み予習する<br>事後学修：キスト第４章の「腹痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 5 | 腹痛④　随伴症候 | 事前学修：テキスト第４章の「腹痛」を読み予習する<br>事後学修：キスト第４章の「腹痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 6 | 腹痛⑤　緊急度・重症度の判断、現場活動 | 事前学修：テキスト第４章の「腹痛」を読み予習する<br>事後学修：キスト第４章の「腹痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 7 | 吐血・下血①　定義・概念、原因疾患 | 事前学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み復習する | 30 | 30 |
| 8 | 吐血・下血②　病態 | 事前学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み復習する | 30 | 30 |
| 9 | 吐血・下血③　判別が必要な病態、緊急度・重症度の判断 | 事前学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み復習する | 30 | 30 |
| 10 | 吐血・下血④　現場活動 | 事前学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「吐血・下血」を読み復習する | 30 | 30 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間（分） | 事後学修時間（分） |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 腰痛・背部痛①　定義・概念、原因疾患 | 事前学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 12 | 腰痛・背部痛②　緊急度・重症度の判断 | 事前学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 13 | 腰痛・背部痛③　現場活動 | 事前学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「腰痛・背部痛」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 14 | 体温の役割について | 事前学修：テキスト152、645、822ページを読み予習をする<br>事後学修：テキスト152、645、822ページを読み復習をする | 30 | 30 |
| 15 | 体温上昇①　定義・概念、発症機序 | 事前学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 16 | 体温上昇②　病態、発熱の分類と種類 | 事前学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 17 | 体温上昇③　原因疾患 | 事前学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 18 | 体温上昇④　緊急度・重症度の判断、現場活動 | 事前学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み予習をする<br>事後学修：テキスト第４章の「体温上昇」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 19 | 救急症候学Ⅲのまとめ①　腹痛、吐血・下血 | 事前学修：腹痛、吐血・下血の項目を再復習する | 60 | 0 |
| 20 | 救急症候学Ⅲのまとめ②　腰痛・背部痛、体温上昇 | 事前学修：腰痛・背部痛、体温上昇の項目を再復習する | 60 | 0 |

| | |
|---|---|
| アクティブ・ラーニング | ☑該当なし<br>☐該当あり：キーワード（　　） |
| 教科書 | 『救急救命士標準テキスト』救急救命士標準テキスト編集委員会、へるす出版 |
| 参考文献 | なし |
| 備考 | |

| 実務経験を有する教員による授業科目（実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性） |
|---|
| |

| 学修成果 | 1<br>基礎力 | 2<br>実践力 | 3<br>人間関係力 | 4<br>生涯学習力 | 5<br>地域理解力 |
|---|---|---|---|---|---|
| | ● | ● | ● | ● | |

| 科目ナンバリング |
|---|
| EM-2-DEM-03 |

| 科目名 | 疾病救急医学Ⅲ | | | 単位認定者 | 佐藤　武論毅 | | 評価の方法 | 試験(筆記) | 90　% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 対象学科<br>必修･選択<br>配当年次 | 救急救命学科 | 必修 | 1年 | 開講時期 | 後期 | 単位数 | 2　単位 | 受講態度 | 10　% |
| | | | | | | 授業時間数 | 40　時間 | | |
| | | | | 授業形態 | 講義 | 授業回数 | 20　回 | | |

| 授業の概要 | 救急救命の現場で遭遇することの多い疾患について学修する。血液・免疫系疾患は、アナフィラキシーを除けば傷病者の救急搬送時に問題となる機会は少ない。ただし、貧血や出血傾向等は重症傷病者に附随する病態であることが多く、観察や処置を的確に実施するためには、その基本的な理解が必須である。<br>筋・骨格系疾患は、強い疼痛や歩行困難のために救急搬送される頻度が比較的高いが、緊急度は概ね低い。ただし、一般的な主訴である腰痛をきたす疾患には大動脈疾患や腎疾患が、肩の痛みをきたす疾患には心筋梗塞等が含まれており、頻度は低いが緊急度・重症度は高い疾患であるケースもあるため、慎重な判断が求められる。皮膚系疾患は、皮膚病変が内蔵疾患と密接に関連している場合が多く、皮膚所見のみならず、全身疾患の部分症状として認識する必要がある。「疾病救急医学Ⅲ」では、血液・免疫系疾患、筋・骨格系疾患、皮膚系疾患、感覚系疾患について、それぞれの発症機序、症候、症状、所見、予後、観察、評価、鑑別処置及び搬送法等を学修する。救急救命士として様々な疾患を持つ患者に適切に対応できるようにするための、基本的な知識を修得する。 |
|---|---|
| 到達目標 | 1.　血液・免疫系の疾患、発症機序、症候、観察、評価、処置等を説明できる。<br>2.　筋・骨格系の疾患、発症機序、症候、観察、評価、処置等を説明できる。<br>3.　皮膚系の疾患、発症機序、症候、観察、評価、処置等を説明できる。<br>4.　眼・耳・鼻の疾患、発症機序、症候、観察、評価、処置等を説明できる。 |
| 学修者への期待等 | 今日置かれている救急活動の重要性を認識し、どのような症例にも冷静に迅速的確な緊急度・重症度の判断と現場対応ができるよう知識、技術をしっかりと修得してほしい。 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間(分) | 事後学修時間(分) |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 血液・免疫系疾患①　総論 | 事前学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 2 | 血液・免疫系疾患②　血液系疾患 | 事前学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 3 | 血液・免疫系疾患③　免疫系疾患 | 事前学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 4 | 血液・免疫系疾患④　アナフィラキシー | 事前学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 5 | 筋・骨格系疾患①　総論 | 事前学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 6 | 筋・骨格系疾患②　脊椎疾患 | 事前学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 7 | 筋・骨格系疾患③　脊椎疾患、関節疾患 | 事前学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み復習をする： | 30 | 30 |
| 8 | 筋・骨格系疾患④　関節疾患 | 事前学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 9 | 筋・骨格系疾患⑤　筋疾患 | 事前学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「筋・骨格系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 10 | 皮膚系疾患①　総論 | 事前学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間（分） | 事後学修時間（分） |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 皮膚系疾患②　皮膚・軟部組織の感染症 | 事前学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 12 | 皮膚系疾患③　アレルギー性疾患 | 事前学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 13 | 皮膚系疾患④　その他の皮膚疾患 | 事前学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「皮膚系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 14 | 眼・耳・鼻の疾患①　総論（眼に関する主要症候） | 事前学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 15 | 眼・耳・鼻の疾患②　総論（耳に関する主要症候、鼻に関する主要症候） | 事前学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 16 | 眼・耳・鼻の疾患③　眼の疾患 | 事前学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 17 | 眼・耳・鼻の疾患④　耳の疾患 | 事前学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 18 | 眼・耳・鼻の疾患⑤　鼻の疾患 | 事前学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「眼・耳・鼻の疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 19 | 血液・免疫系疾患、筋・骨格系疾患の復習 | 事前学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患、筋・骨格系疾患」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「血液・免疫系疾患、筋・骨格系疾患」を読み復習をする | 30 | 30 |
| 20 | 皮膚系疾患、眼・耳・鼻の疾患の復習 | 事前学修：標準テキストの「皮膚系疾患、眼・耳・鼻の疾」を読み予習をする<br>事後学修：標準テキストの「皮膚系疾患、眼・耳・鼻の疾」を読み復習をする | 30 | 30 |
| **アクティブ・ラーニング** | ☑該当なし<br>☐該当あり：キーワード（　　） | | | |
| **教科書** | 『救急救命士標準テキスト』救急救命士標準テキスト編集委員会編集、へるす出版社 | | | |
| **参考文献** | 『新版からだの地図帳』佐藤達夫監修、講談社 | | | |
| **備考** | | | | |

| 実務経験を有する教員による授業科目（実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性） |
|---|
| |

| 学修成果 | 1<br>基礎力 | 2<br>実践力 | 3<br>人間関係力 | 4<br>生涯学習力 | 5<br>地域理解力 |
|---|---|---|---|---|---|
| | ● | ● | ● | ● | |

| 科目ナンバリング |
|---|
| EM-2-DEM-04 |

| 科目名 | 疾病救急医学Ⅳ | | | | 単位認定者 | 柳　聖美 | | 評価の方法 | 試験(筆記) | 70　% |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 対象学科<br>必修･選択<br>配当年次 | 救急救命学科 | 必修 | 1年 | 開講時期 | 後期 | 単位数 | 2　単位 | | 授業内課題等 | 20　% |
| | | | | | | 授業時間数 | 40　時間 | | 受講態度 | 10　% |
| | | | | 授業形態 | 講義 | 授業回数 | 20　回 | | | |

| 授業の概要 | 救急救命の現場で遭遇することの多い特徴的な疾患について学修する。小児の救急疾患は、基本的には成人の場合と処置は同様だが、訴えが不明瞭であるために重症度の判断や重症化の予知が困難等の特徴がある。小児の年齢によって好発する疾患があり、同じ疾患でも低年齢ほど重症化しやすいことも特徴といえる。高齢者の救急疾患には、加齢による身体機能や精神機能の変化を背景とした疾患であることが多い。母体の救急疾患には、母体と胎児・新生児の観察・処置等を同時に行うという特殊性があり、分娩介助が必要となる場合もある。精神障害には、それぞれの精神症状にあわせた適切な対応が求められ、自傷他害の恐れがあるケースもある。「疾病救急医学Ⅳ」では、小児に特有な疾患、高齢者に特有な疾患、妊娠・分娩と救急疾患、精神障害について、それぞれの発症機序、症候、症状、所見、予後、観察、評価、鑑別処置及び搬送法等を学修する。救急救命士として様々な疾患を持つ患者に適切に対応できるようにするための、基本的な知識を修得する。 |
|---|---|
| 到達目標 | 各項目のそれぞれの傷病者に対しての知識を深めるとともに、必要な対応ができるようになる。 |
| 学修者への期待等 | 授業で学んだ症例がシミュレーションの症例としても出てきます。実習だけではなく、社会動向も含めて関心を持ち理解を深めてほしい。様々な疾患を持つ傷病者に寄り添い、適切な対応ができることを期待する。 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間(分) | 事後学修時間(分) |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 感染症①：総論 | 事前学修：P. 634～P. 636を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 2 | 感染症②：敗血症、結核 | 事前学修：P. 636、637を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 3 | 感染症③：インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症、食中毒 | 事前学修：P. 637～P. 640を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 4 | 感染症④：輸入感染症、発疹性感染症 | 事前学修：P. 640、641を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 5 | 感染症⑤：性感染症、その他の感染症 | 事前学修：P. 641～P. 643を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 6 | 小児に特有な疾患①：総論 | 事前学修：P. 644～P. 646を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 7 | 小児に特有な疾患②：観察と判断 | 事前学修：P. 646、647を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 8 | 小児に特有な疾患③：神経系・呼吸系 | 事前学修：P. 647～P. 650を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 9 | 小児に特有な疾患④：消化系・感染症 | 事前学修：P. 650、651を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 10 | 小児に特有な疾患⑤：その他の疾患 | 事前学修：P. 651～P. 653を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |

| 回 | 授業計画 | 準備学修 | 事前学修時間（分） | 事後学修時間（分） |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 高齢者に特有な疾患①：総論 | 事前学修：P. 654、655を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 12 | 高齢者に特有な疾患②：高齢者疾患の特徴、高齢者の置かれた状況、傷病者への対応（実技を含む） | 事前学修：P. 655～P. 657を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 13 | 高齢者に特有な疾患③：認知症、誤嚥性肺炎、骨粗鬆症 | 事前学修：P. 658～P. 660を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 14 | 高齢者に特有な疾患④：せん妄、脱水、褥瘡、廃用症候群 | 事前学修：P. 660を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 15 | 妊娠・分娩と救急疾患①：正常妊娠と妊娠経過 | 事前学修：P. 661～P. 665を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 16 | 妊娠・分娩と救急疾患②：妊娠・分娩・産褥に関する異常 | 事前学修：P. 665～P. 668を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 17 | 妊娠・分娩と救急疾患③：観察と処置（実技を含む） | 事前学修：P. 669、670を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 18 | 妊娠・分娩と救急疾患④：妊産婦の心肺蘇生、出産時の新生児の蘇生（実技を含む） | 事前学修：P. 670～P. 675を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 19 | 精神障害①：総論、主な精神障害 | 事前学修：P. 676～P. 684を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| 20 | 精神障害②：向精神薬の主な副作用 | 事前学修：P. 684、685を読んでおくこと<br>事後学修：授業後には内容の復習、関連資料の復習、課題への取り組みを行うこと | 30 | 30 |
| **アクティブ・ラーニング** | ☐該当なし<br>☑該当あり：キーワード（　実技　） | | | |
| **教科書** | 『救急救命士標準テキスト』救急救命士標準テキスト編集委員会、へるす出版 | | | |
| **参考文献** | なし | | | |
| **備考** | 資料の配布、課題のフィードバックについては授業内で行います。 | | | |

| **実務経験を有する教員による授業科目（実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性）** |
|---|
| ― |